工事常識 材料の研究と着眼点

建築材料見積の研究（4）

林　有　一

經驗の深い林氏が、筆に委せて長い間の研究を此所に趣味的に書き出さんとするものである。總て工事の經營は着眼點が大切である。二月號より精讀を乞ふものである。(編者)

【元來我國の檜には】 特有の香氣と光澤があつて、その粘靱な材質は水濕に耐える點、そり狂ひの少き點など、最優良材としてあらゆる方面に使用される材料であるが、檜の中にも上中下の等級があつて、下等品には杉材に劣るものもある。

西川材とか青梅材と稱する内に包含する檜は其量は至つて尠いが質は良好である、おもに丸太や小角もので、東京市場に供給される紀州の新宮日高方面から產する檜材は、昔から有名で、材質も佳良、大材に富んで居つたが、現今は蓄積量も餘程減少し、大材は得がたく、尾鷲材と稱し、小丸太や小角類が供給されるばかりである。

新宮町に出るものは山出し一里か二里の間を管流し若くは修羅により、十津川を約十里筏で下る。

仕向地は阪神地方、名古屋地方、東京市でおもに和船で直送する。

新宮には大規模の製材所が數ヶ所あつて板に挽立てゐる。

振天動地の大活動によつて、前古未曾有の大勝を博した、かの二十七八年戰役の終了を告ぐるや、かしこくも　明治天皇の御計畫で振天府が建立せられて、校倉(あぜくら)式の珍らしい建築が、總檜造で出來あがつた。近くは

江戸城内の本丸や西丸の御殿にも木曾の檜の上等材が、主要部分に使用せられ大廣間の柱の如きは、眞去り無節七寸八分角乃至一尺角といふ素晴らしいものであつた。白書院も同じく眞去り無節の檜で、六寸五分角の柱が用ひられた。殿上の間、虎の間、遠侍の間になると、同じ檜でも上々小節となり、黑書院は赤松の眞去り無節六寸角であるが、柳の間は栂の眞去り上小節六寸角、其他一段格が落ちる向きには、眞持材で小節となり、材種も檜、槻、栂、赤松、椹、鹽地、桂、姫小松の類が、夫れ夫れ格式に應じて、使用されたといふことであるが、

【純日本風の建築材】 としては節のあるなしで、餘程品格が違ふのである。元來材木には節があり勝ちのもので、大きいのもあれば、小さいのもある、しからばその區別はどうかといふに、普通の慣例では次の規定による。

大	節	徑三寸以上
中	節	徑二寸より三寸迄
小	節	徑二寸以下一寸三分
上小	節	徑一寸三分以下徑七分
上上小	節	徑七分以下(殆んど無節に等し)

木場の貯木場では、材木が多くは水に入れてあるが、その水面に出てゐる方の、木の肌には節が少くて、水面下の方に節が多い、これは比重の關係で當然なことであるが、節を調べるときに、こゝに氣の付く人は少い。